

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	英語の文法及び文法・語形成のインターフェイス
Author(s)	竝木, 崇康
Citation	茨城大学教育学部紀要（教育総合）(増刊号): 229-243
Issue Date	2014
URL	http://hdl.handle.net/10109/11986
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

英語の文法及び文法・語形成のインターフェイス

竝木 崇康*

(2014年8月8日受理)

An Interesting Phenomenon in English Grammar and Interface between English Grammar and Word Formation

Takayasu NAMIKI*

(Received August 8, 2014)

Abstract

An interesting grammatical use of a main verb *help* is examined from a viewpoint of its various uses with *to*-infinitive and bare infinitive constructions. In particular, similarities and differences between the verb *help* and modal auxiliary verbs in English are investigated. Furthermore, the omissibility of a head is discussed both in English syntax and in English word formation, specifically in compounding.

はじめに

本論においては、現代英語の文法 (grammar), あるいは統語論 (syntax) において近年目立つようになってきた用法と、現代英語の語形成 (word formation), あるいは形態論 (morphology) と呼ばれる分野と文法との境界領域で見られる重要な現象を取り上げる。具体的には、第1節において、*help* という本動詞 (main verb) の用法における興味深い特徴について述べ、第2節と第3節においては、統語論においても形態論においても共通して重要な概念である「主要部 (head)」と「修飾部 (modifier)」の関係について、特に主要部の省略可能性について論じる。

*茨城大学教育学部英語教育教室英語学研究室 (〒310-8512 水戸市文京2-1-1; Department of English Education, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan)

1. 現代英語における本動詞 *help* の用法

1.1 本動詞と助動詞の区別

現代英語 (Present-day English) においては、本動詞と助動詞 (auxiliary verb) には通例はつきりとした区別がある。第一に、本動詞と助動詞が同じ平叙文 (declarative sentence) の中に生起する場合には、助動詞が本動詞の前に現われる。(1) を参照のこと。(以下、本動詞を下線によって、助動詞をイタリック体によって、示すこととする。)

- (1) a. You *can* do it. (あなたならできます。君ならできる。)
 b. *You do *can* it.

このことは、助動詞が *can*, *must*, *may* などのいわゆる法助動詞 (modal auxiliary verb) だけでなく、進行形や受動態を導く *be* 動詞と、完了形に現われる *have* においても同様である。(2) を参照。

- (2) a. Lisa *was* reading a book.
 b. The book *was* written by Noam Chomsky.
 c. Edwin *has* just finished writing an article.

さらに、助動詞としての *have* と本動詞としての *have* が共起する場合でも、同じことが成り立つことが (3) の例から明らかである。

- (3) When Tom turned 19-years-old, he *had* already had a driver's license. (形式ばった文体で)

第二に、法助動詞のみと共に本動詞が用いられるときには、本動詞は常に原形 (root form) で使われるが、法助動詞に加えて助動詞の *have* や *be* と共に本動詞が現われるときには、直前の助動詞によって本動詞の形が決められる。(4) を見てほしい。

- (4) a. Peter *will* come soon.
 b. Tim *should have* attended the class.
 c. You *could have been* imagining it. (Greenbaum and Nelson 2009, p. 11)

第三に、助動詞と本動詞が共起する場合、疑問文において助動詞は文頭に移動するが、本動詞は移動しない。(5) を参照。

- (5) a. *Will* Peter come soon?
 b. *Come Peter *will* soon?
 c. *Was* Lisa reading a book?
 d. *Reading Lisa *was* a book?

第四に、法助動詞は過去形を持つが過去分詞形を持たない。一方、(6) からわかるように、本動詞は過去形と過去分詞形の両方を持つ。

- (6) a. can – could , will – would, may – might, shall – should
 b. do – did – done, write – wrote – written , finish – finished – finished

第五に、法助動詞は否定辞 not との縮約形 (contracted form) を持つが、本動詞は持たない。

- (7) You shouldn't do it.

以上の5つの点から、本動詞と法助動詞の一般的な文法的相違点ははっきりしたと置いていいであろう。次に、本論で問題にする help という本動詞の文法的な特徴について述べる。

1.2 本動詞 help の文法的な特徴

まず英語の辞典によってどのように help という動詞が特徴づけられているかを見てみよう。特にここでは、help がその後ろに不定詞を取る構文について取り上げる。(8) では、基本的な語彙に基づいて単語の意味を示している辞書の代表的なものの1つである、Longman Dictionary of Contemporary English, new edition (2003) (以下では LDCE 2003 と略記する) における help の記述の中から、特に不定詞を取る用法について見ていく。

- (8) **help** /help/ v 1 [I, T] to make it possible or easier for someone to do something by doing part of their work or by giving them something they need: **help sb (to) do sth** *I helped her to carry her cases up the stairs. | She helped him choose some new clothes. help (to) do sth* *She was coming to help clean the machines.* |

help にはもちろん他の用法もあるが、不定詞を後取る用法の基本的なものは(8)に示されていると言ってよいであろう。つまり help はその後ろに直接目的語を取り、さらにその後不定詞を取るときには、to 付き不定詞 (I helped her to carry her cases ...) でも原形不定詞 (つまり to の付かない不定詞, helped him choose some new clothes.) でもよい。また、help がその後ろに直接目的語を取らず不定詞をすぐ取る場合もあるが、そのときも同様に to を取っても取らなくてもよい (...to help clean the machines.) ということが(8)の記述からわかる。さらにこれらのことを裏付ける実例を、以下にあげる。

- (9) a. This experience helped him to decide his purpose in life, which was to educate Japanese people to think in new ways so that Japan could become stronger. (Yutaka Waku and Bill Benfield, 2008, *Across the Pacific Ocean*, Seibido, p. 27)
 b. After his retirement, Reischauer continued his efforts to help people understand Japan, but now as a scholar and teacher rather than an ambassador. (*ibid.*, p. 7)

- c. He was promoted to the rank of captain in 1837 and led a US expedition to Africa with the aim of helping to suppress the slave trade. (*ibid.*, p. 17)
- d. Walt died in 1966. But his trusted friends helped make his dream come true.
(Randal Hill, 2003, *Culture Clips 1*, MacMillan Languagehouse, p. 51)

1.3 help と help 以外の類似の用法を持つ動詞との比較

ここで help 以外の本動詞で、同様に直接目的語と不定詞をその後ろに取るものをあげてみよう。それらは大きく分けて2つのグループに分けられる。第一は、cause, force, enable, want などのように、その直後に直接目的語と to 付き不定詞を取るものであり、第二は make, let などのように、直接目的語と原形不定詞を従えるものである。それぞれのグループの例文を、(10) と (11) で示す。

- (10) a. It was inevitable that these countries would eventually try to force Japan to open up so that they could establish some kind of trading relationship. (Waku and Benfield, 2008, p. 16)
- b. The loan enabled Jan to buy the house. (*LDCE 2003*)
- (11) a. Maria makes me laugh. (映画“Sound of Music”のせりふ)
- b. Let it be. (The Beatles の歌の題名)

第一のグループの最初の2つの例は、(10)に示されたように、その動詞が to 付き不定詞を取るときは直接目的語が必要である (cf. *The loan enabled to buy the house.)。また直接目的語の後の原形不定詞の形も許されない (cf. *The loan enabled Jan bury the house.)。ただし want などの動詞は、後ろに to 付き不定詞が現われる場合、直接目的語はあってもなくてもよい (cf. Dean wanted (Tom) to work for the company.)。

それに対して、(11)にあげられたように、第二のグループの動詞の例に関しては、動詞の後は目的語と原形不定詞のペアが現われ、目的語のない形や to 付き不定詞の形は許されない (cf. *Maria makes laugh. *Maria makes me to laugh.)。

これらの二つのグループの動詞は、help のように目的語があってもなくてもいいとか、不定詞は to を伴っても伴わなくてもよいというような融通の利く動詞とは異なり、目的語の有無や不定詞の形に関しては制限が強い。言い換えると、後ろに目的語と不定詞を取る動詞の中で、help は他の動詞よりも制限がゆるいという特徴を持っていると言える。

さらに help は、(9 d) で示されているように、原形不定詞の直前に現われるという、法助動詞に類似した特徴も持っている。しかしながら、法助動詞とは違って、help は疑問文で文頭に現われるといういわゆる「主語・助動詞倒置」の現象を引き起こしたりはしないし、否定辞 not との縮約形も持たないことが、(12)の例文から明らかである。

- (12) a. *Help(ed) his trusted friends make his dream come true?
- b. *His trusted friends helpdn't (or helpn't) make his dream come true.

つまり **help** という動詞は、法助動詞と少し似ているところがあるが、法助動詞とは言えないし、かと言って、他の通常の本動詞 (*cause, force, enable, make, let*) と全く同じであるとは言えない、特異な本動詞であるということになる。

1.4 help と need の比較

上で述べてきた本動詞 **help** の他に、助動詞のようにも使われる性質がある本動詞に **need** がある。この単語も *LDCE 2003* で調べてみると次のようになっている。

- (13) **need**¹ /ni:d/ v 1 [T not in progressive] to have to have something or someone, because you cannot do something without them, or because you cannot continue or cannot exist without them; ... | **need sb to do sth** *I need you to help me with the cooking.*
- 2 [T not in progressive] to feel that you want something very much: ... | **need to do sth** *She said she needed to go out for a walk.*
- 3 **need to do sth** used when saying that someone should do something or has to do something: *He needs to see a doctor straightway.*
- 4 [modal] BrE used in negative sentences when saying that something is not necessary or not always true; **need not/ needn't** *You needn't stay long.*

(13) からわかるように、本動詞としての **need** はその語義が 1 と 2 に述べられ、また不定詞を取る使い方に関しては 1 - 3 に例文があげられており、**to** 付き不定詞をその後に取り、直接目的語を従えることがあることがわかる。これらの点は **help** と同じである。しかし **need** は **help** と違う点が 2 つある。まず **need** には上記の 4 からわかるように、**needn't** という否定辞 **not** の縮約形がある。さらに、**need** は疑問文において主語との倒置を起こせる。次例を参照。

- (14) Need he go at once? (『リーダーズ英和辞典』初版、机上版)

言い換えると、**need** は明確に法助動詞としての用法もあるということで、上記 (13) の 4 でも **modal** (法助動詞) という表記がはっきりとなされている。

上記の 1.1 から 1.4 で述べてきたことから明確になったことは、動詞 help が法助動詞と似ている点は、原形の動詞の直前に現われることができる (例文 (8) の最後の例と例文 (9 d) を参照のこと) という点だけである。

1.5 本動詞 help の特異性

1.4 までに述べてきたことをもとにして、不定詞を後取る性質を持つ助動詞と本動詞を、通常の法助動詞から通常の本動詞までのいくつかの段階に分けて、(15) で示してみよう。

- (15) A. 通常の法助動詞 (本動詞としての用法はないもの)
(例: can, must, will, should, etc.)

B. 法助動詞と本動詞の両方の性質を持つ動詞

(例： need)

C. 基本的には本動詞であるがごくわずか法助動詞の性質を持つ動詞

(例： help)

D. 通常の本動詞（法助動詞としての用法はないもの）

(例： cause, force, enable, want, etc.; make, let, etc.)

上の（15）からわかるように、help という動詞は、原形不定詞の直前に現われることができるという点では法助動詞に類似しているが、その他の点では通常の本動詞と同じ性質を持っているという点で、特異な点を持っていると言えよう。

以上で述べてきた help という本動詞は、現代英語の中では大変変わっている特徴を持っている。本稿ではその余裕がなかったが、さらには英語史において help という動詞の歴史的な発達という観点からの調査をすることが今後の課題と言えよう。

2. 句の主要部に見られる興味深い現象

2.1 統語論における「句の主要部」の概念

まず狭い意味での文法、または統語論とは、言語学のどのような分野か、という基本的な点から始めよう。その名も Syntactic Theory, 2nd edition (『統語論第2版』) という Borsley (1999) から該当する箇所を引用する。

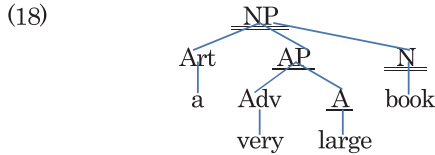
- (16) Most syntacticians assume that words are grouped together to form larger units or phrases of various kinds. (Borsley 1999, p. 15)

ここで言われている phrase (句) の最大のもは sentence (文) であるから、ごく大雑把に言うと、統語論とは、「文における最小の単位である (さまざまな) 単語が、より大きなまとまり (構成素) を作り、それぞれの構成素が結びついて1つの文を作り上げる際の規則性を体系的に述べたもの」と言うことができる。

そして単語から句が作られるとき、基本的には句を作る中心となる単語があり、その単語が持つ特性が句全体に引き継がれる。たとえば、名詞 (noun, N と省略、以下同様) が中心となって、その前の冠詞 (article, Art) とともにより大きな構成素を作るときは、名詞の特性が引き継がれて名詞句 (noun phrase, NP) を作る。この場合には名詞が主要部 (head) と呼ばれる。同様に、形容詞 (adjective, A) が中心となり、その前の副詞 (adverb, Adv) とともにより大きな構成素を作るときは、形容詞の特性が引き継がれて形容詞句 (adjective phrase, AP) を作る。この場合には形容詞が主要部と呼ばれる。以下の (17) に具体例をあげる。

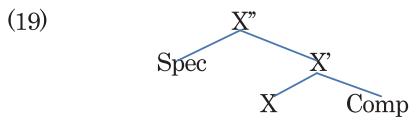
- (17) a.  b. 

さらに複雑な例として、名詞句の中に形容詞句が含まれているものもある。(18)を見てほしい。

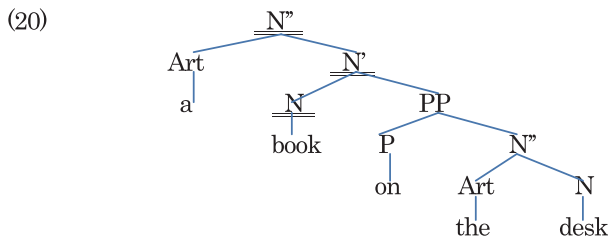


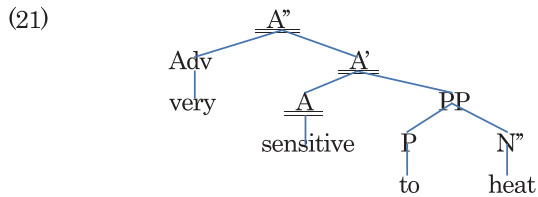
上記の(18)においては、APにおける主要部はA(形容詞)であるが、それよりも大きな句であるNP(名詞句)における主要部はN(名詞)である。

以上で示したように、統語論における「句の主要部」というのは、それが投射 (projection) されることによって句を作るものであり、いわゆる「Xバー理論 (X-bar theory)」がその中核をなす。Xバー理論における基本的な考え方は、(19)のように図示される。



ここでの Comp というのは任意の語彙範疇 (lexical category) である X が取る complement (穂部) のことであり、その X と Comp がより大きな構成素である X' (X プライム) を構成する。そしてその X' の前にある Spec であるが、これは X' を前から限定する specifier (限定表現) のことであり、その Spec と X' がより大きくかつ最大となる構成素である X'' (X ダブルプライム) を構成する。もし X という変項 (variable) の値に N を選べば、Comp としてはたとえば前置詞句 (prepositional phrase, PP) が現われ、Spec としては冠詞が現われる。また X として A を選べば、Comp としては前置詞句が現われ、Spec としては程度を表わす副詞などが現われる。それらの例を(20)と(21)に示す。





言い換えると、(20)においては、book という名詞の特性が、a book on the desk という名詞句全体の特性を決定していると言えるし、(21)においては sensitive (敏感な) という形容詞が very sensitive to heat (熱にとっても敏感な) という形容詞句全体の特性を決定していると言える。このような性質を持っているのが、統語論における「句の主要部」という概念である。この論文においては主要部は義務的な要素、つまり句を形成する際に必須である要素である。

2.2 句において主要部が省略されている表現

上記2.1において句の主要部は義務的であると述べた。そして、ほとんどの句の例において主要部が現われることは事実である。しかし、場合によっては義務的であるはずの主要部が省略されていると考えるべき例がある。次の(22)を見てほしい。

- (22) Each day, one million people drink a Coke. This popular soft drink is enjoyed in around 200 countries. Coca-Cola is the best-known brand name in the world. People in China love to drink it. But, when Coca-Cola first came to China in the 1920s, some comical language problems occurred. Shopkeepers were confused by the words “Coca-Cola,” which were new to their culture. The closest they could come to a translation was to say that “Coca-Cola” meant a drink called “Bite the Wax Tadpole.” (Randal Hill, 2003, *Culture Clips 1*, MacMillan Languagehouse, p. 14, 下線は筆者(竝木)による。)

上記(22)における最後の文を見ると、わかりづらい箇所がある。それはこの文の主語である The closest they could come to a translation という部分であるが、ここの to a translation は前どの部分と関連を持つのか、すぐにはわかりにくい。まず思いつくのは、come と関連して come to a translation という動詞句を構成すると考える可能性であろう。しかしそうすると、文頭の The closest とそれ以降の they could come to a translation とがどのように関連を持つのかははっきりしなくなってしまう。

そこで別の可能性として考えられるのは、The closest thing (….) to … is … (～に最も近いもの、～に最も類似しているものは～である) というイディオムである。このイディオムは、たとえば通常では次の(23a)のように使われる。

- (23) a. The closest thing to the traditional Japanese ideal I can think of is the famous British ‘stiff upper lip.’ (Herbert Passin, 1977, *Japanese and the Japanese*, p. 101, Kinseido Publishing Company.)

b. *The thing to the traditional Japanese ideal I can think of is …

c. The closest to the traditional Japanese ideal I can think of is …

(Namiki 1994, p. 282)

(23a) が述べていることは、「その伝統的な日本（人）の理想に、私が考えつく最も近いものは、イギリス人の「物事に動じないこと」という有名な表現である。」というようなことであろう。ただしこのイディオムでは *thing* の前の形容詞 *close* という修飾語 (*modifier*) が現われることが必要であり、それを省略してしまうと (23b) からわかるように、非文法的になってしまう。一方、大変興味深いことに、*The closest thing* という名詞句の主要部である *thing* という名詞が省略された場合 ((23c) の例) には文法的な文となり、しかも文全体の意味は (23c) のそれとほぼ同じである。

なお補足して言うと、(22) と (23a) からわかるように、この *The closest thing to ...* というイディオムでは、*The closest thing* を修飾する制限的關係代名詞 *that* に導かれる関係節 (つまり (22) では (*that*) *they could come*, (23a) では (*that*) *I can think of*) が *The closest thing* の後ろに続くが、その関係代名詞 *that* は省略されても構わない。それはちょうど、*The Beatles* の歌の題名である “*All you need is love.*” においても、やはり関係代名詞である *that* が *All* と *you* の間で省略されていることと同じである。

上記のように考えると、問題となっている (22) の最後の文は、(24) のような派生の過程を経て生成されたと考えることが妥当である。(なお ϕ は単語が削除されたことを示すゼロ記号である。)

(24) The closest thing that they could come to a translation was to say ...

↓

The closest ϕ ϕ they could come to a translation was to say ...

それでは、なぜ (24) のような派生が可能になるのであろうか。断定的なことは言えないが、少なくとも次のように考えることが適切であると思う。まず関係代名詞 *that* の省略に関しては、*all* や形容詞の最上級の形の後で省略されることは広い範囲で見られるので問題はない。重要なのは、なぜ *thing* という、名詞句の主要部である名詞が省略されるのか、ということである。ここで注意すべきことは、*thing* という名詞は語彙的に稀薄な意味しか持っていないという点である。その証拠に、既に述べたように、ともに文法的である (23a) の文と (23c) の文の意味はほとんど同じであるということがあげられる。言い換えると、(23a) の文においては *thing* という名詞はあってもなくても、その文の文法性にも文全体の意味にもほとんど影響を与えないということになる。

と言うことは、本来 *The closest thing* という名詞句の主要部であるはずの *thing* という名詞が、実は主要部に一般的に成り立つはずの「義務的であること」という条件を満たしていないことになる。そのような例外的な状況が許されるのは、おそらく *The closest* という表現が形容詞の最上級の形であると同時に、「最も近いもの」という名詞的な意味を持っているからであると考えられる。それはたとえば、*the best and brightest* という「最良で最優秀な人々」という名詞的な表現からも

うかがえる。

これと似たような他の例を（25）にあげる。

(25) a very different matter from applause

(Nida 1966, p. 92)

そしてこの表現は、たとえば That's ... という文脈においては（26）と同じように使われることができる。

(26) very different from applause

(Namiki 1994, p. 282)

すなわち matter（もの、物事）という語彙的には稀薄な意味の単語も、名詞句の主要部の位置に現われているが、必ずしもなくてはならない要素ではなく、be 動詞の補語の位置などでは（25）は（26）のような形容詞句とほぼ同じ意味になってしまう。

以上をまとめると、本来ならば義務的であるはずの、名詞句の主要部が、それが語彙的に稀薄な意味しか持っていない場合には省略可能となることがあるということが示されたと言えるだろう。

3. 複合語の主要部における同様の現象

3.1 語形成における「単語の主要部」の概念

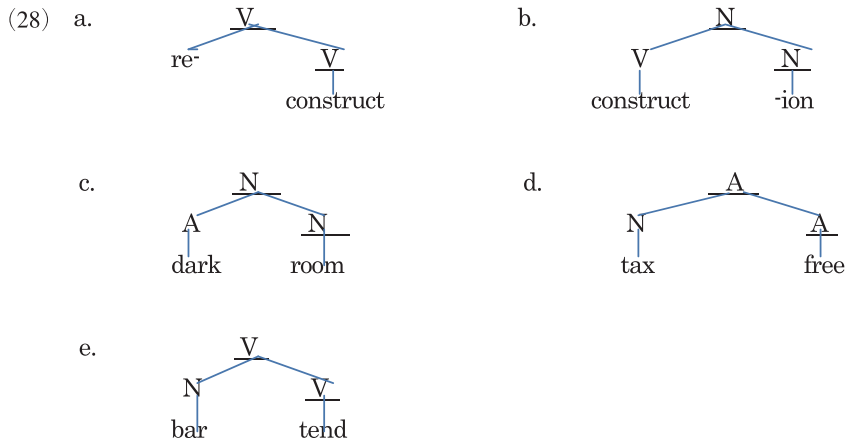
生成文法理論における形態論においては、「句の主要部」とは異なる形で「単語の主要部」という概念が規定されている。それは Williams (1981) が提唱した「右側主要部の規則 (The Righthand Head Rule)」という、派生（単語に接頭辞や接尾辞を付加して別の単語を作る仕組み）と複合（2つ以上の単語同士を並列して別の単語を作る仕組み）に課された一般的な規則に関わる。Williams は、派生語全体や複合語全体の語彙範疇 (lexical category) を決定する要素を「単語の主要部」ととらえている。たとえば、construct（建設する）という動詞に接頭辞 re-（再び）を付加すると reconstruct（再建する、再び建設する）という動詞ができるが、一方 construct に -ion という接尾辞を付加すると construction（建設（すること））という名詞ができる。そこで、Williams は reconstruct という単語の主要部は動詞の construct であり、逆に construction という単語の主要部は接尾辞の -ion であると主張している。このように考えると、複合語の場合だけでなく派生語、つまり接頭辞や接尾辞が付加されてできた単語、の場合にも、右側の要素が全体の単語の品詞を決定しているということが的確にとらえられる。この一般性をとらえようと提案されたのが「右側主要部の規則」であり（27）のように述べられている。

(27) 右側主要部の規則

形態的に複雑な単語（つまり派生語と複合語）の主要部はその右側の要素である。

(Williams 1981, p. 248)

そして、派生語と複合語においてこの規則を支持する例は以下のようなものである。



(竝木 1985, pp. 114-115, 竝木 2009, p. 64)

この右側主要部の規則によれば、(28)にあげられたような派生語と、2つの単語の語彙範疇、つまりいわゆる品詞、の異なる複合語の場合には、確かに大多数の例において右側の要素が主要部であることは確実に示される。ただし、複合語において2つの要素が同一の語彙範疇に属する場合はどのように考えるか、は問題になりうる。たとえば、*bedroom* (寝室)とか、*deaf-mute* (耳と口が不自由な)というような例がこの場合に該当する。両者を図示すると、(29)のようになる。



この場合について右側主要部の規則が適用するかどうかは、少なくとも2つの可能性が考えられる。1つは、同一の語彙範疇でも右側の要素が当該の規則に従って主要部になると考えることである。つまり(29a)では *room* が、(29b)では *mute* が主要部になるということになる。そうすると、*bedroom* の場合には、少なくとも *room* が名詞であることは明らかなので、この例が右側主要部の規則を支持することはないが、少なくとも矛盾しない (*compatible*) ということにはなるので、さほど問題は起らないかもしれない。それは、このような複合名詞の場合には、最初の要素が2番目の要素の修飾語として働くからである。しかし *deaf-mute* の場合にはどうであろうか。この複合形容詞はいわゆる等位関係 (A and B) にあるので、右側の *mute* が主要部であると考えるのは、通常の等位複合語 (*coordinate compound*) に関する基本的な考え方と合わなくなるであろう。

もう1つの可能性は、同じ語彙範疇の単語同士が複合語を構成するときには、どちらが主要部か決め手がないので、右側主要部の規則は適用しないと考えることである。しかしこの場合でも、ど

これらの要素も同じ範疇なのでそれ以外の範疇になることは考えにくく、結果的には両方に共通の範疇にならざるをえないということになるのかもしれない。しかしどちらの可能性を支持するにしても、同一の語彙範疇に属する要素から成る複合語の場合には、右側主要部の規則に関する多少の問題点として残るであろう。

ここまでのところで注意すべき点は、上記の Williams (1981) による右側主要部の規則は、あくまでも派生語と複合語に関して、その単語全体の語彙範疇を決定する要素を「単語の主要部」と考えているということである。一方、それとは別の考え方に立った提案も従来なされてきた。たとえば、Allen (1978) は“The IS A Condition”という条件を立てて、派生語と複合語に関して、意味的にその単語全体の意味の中核をなし、その単語全体の語彙範疇を決定する要素を「単語の主要部」と考えることを提案している。(30)にその条件をあげる。

(30) 「IS A の条件 (The IS A Condition)」

[[…]X […]Y]Z, という構造を持つ複合語においては、Z は Y の一種である。

(Allen 1978, p. 105)

この条件が述べていることは、X と Y という要素からできている複合語 Z は Y の一種である (Z “IS A” Y) ということである。Allen はこの条件を複合語だけでなく派生語にも拡大しているので、拡大された「IS A の条件」が扱う範囲は Williams (1981) と同じと言っていいであろう。(30) に関して Allen があげている例は次のようなものである。

(31) a steam-boat IS A boat; a silk-worm IS A worm; a beer-can IS A can

言い換えると、Allen が主張していることは、「(一般的に) Z は Y の一種である」という意味的な一般性を捉えようという趣旨であると考えられる。この主張は darkroom (暗室), blackboard (黒板), White House (アメリカの大統領官邸) のように、2つの要素が異なる場合にも成り立つ。さらに単語全体の語彙範疇の決定という点においても、うまく扱える。たとえば、dark は形容詞であり、room は名詞であり、darkroom 全体は名詞であるから、複合語全体の語彙範疇の決定という点でも「IS A の条件」は適切なものと考えられる。

以上述べたように、「単語の主要部」という概念は統語論における「句の主要部」とは異なった形で提案されているが、どのような形で一般的に「単語の主要部」を捉えるべきか依然として十分解明されているとは言えない。ここではこれ以上立ち入らないが、興味のある方は Kageyama (1982), Selkirk (1982), 竝木 (1985), Scalise (1988), 影山 (1993), Namiki (2001), Kageyama (2009), Scalise et al. (2009)などを参照して頂きたい。「単語の主要部」という概念はいまだに未解明な点があるにしても、語形成において重要なものであることには変わりがない。

3.2 語形成における主要部の不在に関わる現象

上記で語形成における「単語の主要部」について述べてきたが、2.2で論じた「句の主要部の省略」と類似の現象が語形成においても見られるので、それについて次に述べる。まず次の例を見てほし

い。

- (32) a. Father Farley is an ideal Lemmon subject: the entertainer at mid-life crisis, with all attendant weary routines and stutter-step timing, and a love-hate relationship with his audience and himself. (*Time*, 12/24/84, p. 36, 下線部は筆者)
 b. *..., and a love-hate with his audience and himself.
 (Namiki 1994, p. 276)

(3 2 a) であげた例文の最後にある a love-hate relationship with his audience and himself という部分の with 以下の前置詞句は直前にある relationship との関係で使われており、その前の love-hate との関係で使われているのではない。このことは、love-hate という表現を省略した例である (3 2 b) が非文法的であることからわかる。そしてこの例からわかるように、ある単語が後ろにどうい(前置詞句) 補部を取るかは、その単語自体の性質によって決まる。その単語の前に修飾語として働く他の名詞が現われて複合語を作っても、特定の(前置詞句) 補部を取るかどうかは、その複合語の 2 番目の要素、つまり主要部が決定することが一般的である。

ところが例外的な場合には、複合語の主要部ではなく修飾部が、後続する(前置詞句) 補部を決定するのに関わっていることを示す例が存在する。次の (3 3) - (3 5) の例を見てほしい。

- (33) a. *a book to modern linguistics
 b. a guide to modern linguistics (現代言語学の手引き (書))
 ≙ c. a guide book to modern linguistics (現代言語学の手引き (書))
- (34) a. *structure to the reanalysis rule
 b. input to the reanalysis rule (その再分析規則への入力)
 ≙ c. input structure to the reanalysis rule (その再分析規則への入力 (構造))
- (35) a. *structure from the reanalysis rule
 b. output from the reanalysis rule (その再分析規則からの出力)
 ≙ c. output structure from the reanalysis rule (その再分析規則からの出力 (構造))
 (竝木 1985, pp. 151-152, Namiki 1994, p. 274)

(3 3 a) からわかるように、a book という表現は後ろに to + 名詞句を取ることはできない。しかし a guide という表現は取ることができ、また a guide book という表現もまた後ろに to + 名詞句を取ることができる。また structure という単語は後ろに to + 名詞句を取ることはできないが、input という単語と input structure という複合語は取ることができる(3 4) からわかる。さらに同様なことが input を output に変えた(3 5) の例からわかる。

言い換えると、これらの 3 つの例で示されていることは、後ろにどのような(前置詞句) 補部を取ることができるかは、複合名詞の主要部となる右側の単語ではなく、むしろ修飾部であるはず

の左側の単語がその決定に関与しているということである。これは(32)にあげられたより一般的な例とは異なるものである。ただしここで注意すべきことは、book や structure という単語は、thing というような語彙的に意味が稀薄なものとは違って、本来その語彙の意味は明確なものであるということである。それにもかかわらず、上記の(33)から(35)で示されていることは、本来は明確な語彙の意味を持っている単語が、ある文脈に置かれるとその意味が稀薄になり、その単語があってもなくてもほぼ同じ意味になってしまうという大変興味深い事実である。このことは上記の(33)から(35)に至るまでの例においては、b.の文とc.の文がほぼ同じ意味(≒)になるということからわかる。なお、上で見てきた guide book における guide や、input structure における input のような、右側主要部の規則やISAの条件から見れば主要部とは言えない単語が後ろに現われる補部の選択に関わるという、意味的には主要部に類似した要素のことを、竝木(1985, p. 153)やNamiki(1994, pp. 277-278)においては「複合語の副主要部(subhead of a compound)」と呼んでいる。

2.2で既に見た統語的な句における省略の場合には、thing のようなもともと語彙的な意味が稀薄な単語が省略可能である事例であった。これとは異なっているが、3.2のここまでで見てきた例もまた、ある文脈が与えられると、語彙的な意味が明確であっても、ある単語が省略可能となり、それがあってもなくても意味がほぼ同じになるというものであった。それではこのような例は、統語論では存在しないのかというと、実際には「副主要部」と類似した現象がある。次例参照のこと。

- (36) a. *propositions to these
 a'. (very) similar propositions to these
 b. *a rule from the other tensing
 b'. a separate rule from the other tensing
 (Namiki 1994, p. 282)

ここでは、名詞ではなく形容詞が直後にある名詞を、いわば飛び越えてその後の前置詞句を選択するのに関与している例になるので、当然のことながら語形成の場合と違って、名詞は現れない。もし名詞になればその部分と直後の名詞が複合語となってしまう、句とはならないからである。そのような相違点はもちろんあるが、句の場合も複合語の場合も、ある例外的な場合には主要部であるはずの単語が省略されることがあるという共通点があることを、以上において述べてきた。

おわりに

本論においては、まず最初に、現代英語の統語的現象として、本動詞 help を取り上げ、それが後ろに不定詞を取るときには目的語の有無、不定詞が to を伴うか否かによってさまざまな組み合わせを示すことを見た。また help はある側面ではいわゆる法助動詞と類似した性質を持つが、その他の点ではやはり本動詞としての性質を持つことも示してきた。完全に法助動詞として使われる can, must, will, should などとは異なるがいくつかの点では法助動詞としても使われる need という本動詞との比較をしたところ、help は need ほど助動詞としての性質が強くないことがわかった。

現代英語においてこのような特性を持つ **help** は興味深い本動詞であると言えるであろう。歴史的な観点から「本動詞の助動詞化」ということとの関連をさらに探る必要がある。

次に、統語論における「句の主要部」と語形成における「単語の主要部」と言う概念を取り上げて比較して、両者は基本的に異なる規定のされ方をしていることを論じた。そして一般的に「主要部」は義務的な要素とされているが、ある条件を満たした場合には、「句の主要部」も「単語の主要部」も省略可能であり、なくても構わないという例が見られることを示した。

引用文献

- Allen, Margaret. 1978. *Morphological Investigations*, unpublished Ph. D. dissertation, University of Connecticut.
- Borsley, Robert. (1999) *Syntactic Theory*, 2nd edition. Arnold.
- Greenbaum, Sidney and Gerald Nelson. (2009) *An Introduction to English Grammar*, 3rd edition. Longman.
- Kageyama, Taro. (1982) "Word Formation in Japanese" *Lingua*, Vol. 57, pp. 215-258.
- 影山太郎. (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- Kageyama, Taro. (2009) "Isolate: Japanese," *The Oxford Handbook of Compounding*, ed. by Rochelle Lieber and Pavol Stekauer, pp. 512-526, Oxford University Press.
- 竝木崇康. (1985) 『語形成』 新英文法選書第2巻, 大修館書店.
- Namiki, Takayasu. (1994) "Heads and Subheads of Compounds," *Synchronic and Diachronic Approaches to Language: A Festschrift for Toshio Nakao on the Occasion of His Sixtieth Birthday*, ed. by Shuji Chiba et al., pp. 269-306, Liber Press.
- Namiki, Takayasu. (2001) "Further Evidence in Support of the Righthand Head Rule in Japanese," *Issues in Japanese Phonology and Morphology*, ed. by Jeroen van de Weijer and Tetsuo Nishihara, pp. 277-297, Mouton de Gruyter.
- 竝木崇康. (2009) 『単語の構造の秘密—英語の造語法を探る—』 開拓社.
- Nida, Eugene. (1966) *A Synopsis of English Syntax*, Mouton.
- Scalise, Sergio. (1988) "The Notion of 'Head' in Morphology," *Yearbook of Morphology*, ed. by Geert Booij and Jaap van Marle, pp. 229-245, Foris.
- Scalise, Sergio, Antonio Fabregas and Francesca Forza. (2009) "Exocentricity in Compounding," *Gengo Kenkyu*, Vol. 135, pp. 49-84.
- Selkirk, Elisabeth. (1982) *The Syntax of Words*, MIT Press.
- Williams, Edwin. (1981) "On the Notions of 'Lexically Related' and 'Head of a Word'," *Linguistic Inquiry*, Vol. 12, pp. 245-274.

辞典類

Longman Dictionary of Contemporary English, new edition, 2003, Longman.

『リ—ダーズ英和辞典』 机上版, 1984, 研究社.